

彦根市埋蔵文化財調査報告 第25集

滋賀県指定史跡湖東焼窯場跡
発掘調査報告書

平成6年3月

彦根市教育委員会

序

彦根の地は、古来より畿内と東国・北国を結ぶ要衝の地でありました。このため、戦国時代には戦が繰り返され、近世には京や西国に対する押さえとして徳川譜代筆頭の井伊家が封じられました。江戸時代を通して彦根藩の治世が続き、この政治的な安定の中で文化の蓄積が行われ、現在の彦根市の基盤が形成されました。

今年度の市内遺跡発掘調査事業として実施しました県指定史跡「湖東焼窯場跡」もその文化の一つであります。江戸時代後期に始められた湖東焼は、60数年の歴史の中で多くの優品を生み出しました。この60数年という時間は、焼物の歴史としては非常に短いものであります、当時の窯業の最先端の技術を集めて焼かれました。歴史の短さは、明治時代以降の技術改革の波を受けず、江戸時代の先端技術をそのまま残している可能性があります。当遺跡は、まだまだ資料の集積をしていく必要がありますが、窯場跡の主要遺構である窯の遺構を確認することができました。今後の発掘調査を進めていく上での手がかりになると考えます。

最後になりましたが、本調査にご協力をいただきました土地所有者の皆様をはじめ、関係各位に対して深く謝意を表するものです。

平成6年3月

彦根市教育委員会

教育長 和田 豊治

例　　言

1. 本書は、国および県の補助を受け実施した市内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査場所は、越川城遺跡が彦根市三津町地先、県指定史跡湖東焼窯場跡が彦根市古沢町字石ヶ崎である。
ただし、この概要報告書には越川城遺跡の報告は、試掘調査で終わったため収録していない。
3. 調査は、次の体制で実施した。

彦根市教育委員会

生涯学習課長	川北　貴
同課長補佐兼文化財係長	日夏　秀喜
同文化財係副主査	本田　修平
同文化財係技師	清水　千恵

4. 現地の発掘調査および資料の整理作業には、大塚智・大西登美子・岡本修・三摩尚之・鈴木千代・田中延雄・出口美代子・富永繁夫・トルン　ティ　ゴウフン・西村昭三・野瀬淳子・林利美・古川善一・古川久・宮川佳也・宮内美香・森秋男・森博子・山川直孝（50音順・敬称略）の方々の協力をいただいた。記して感謝したい。
5. 出土遺物等の資料は、当市教育委員会が保管している。



湖東焼窯跡位置図

1. はじめに

湖東焼は、江戸時代後期に藩窯として栄え、数多くの優品を残しており、その知名度は高いが、窯や工房といった生産跡の詳細は不明であった。これは、明治28年廃窯となって以来、時間の経過の中で遺跡の状態が藪や畠に変わっていたためで、『彦根市史』等の記述の他に少数の研究があるだけで、調査の手が加えられることはなかった。

湖東焼についての資料は以上のような状況であるが、彦根城博物館では展示・研究の主要な柱として「湖東焼」をあげ、資料の収集に努めており、平成2年度の事業として湖東焼窯場跡の測量調査を行った。この調査結果は、彦根城博物館調査報告Ⅱ『湖東焼窯跡測量調査報告書』として報告されている。報告書によると、湖東焼窯跡は藩窯であったことから安政2年の『御陶器場所地面並諸御建前御絵図』があり、この絵図を測量図にかぶせるとテラス等の位置が非常に良く一致しているとの結論がでている。このことから考えると、地形の大幅な改変はなく、主要な遺構は遺存しているものと予想された。また、現地には大量の窯道具や未製品等の遺物が散布している。



湖東焼窯跡全景

彦根城博物館の測量調査で報告された結果、滋賀県教育委員会では近世生産遺跡の代表的な遺跡として、平成3年3月に県指定史跡として指定した。その後、彦根市教育委員会では県の補助を受け、平成4年度に地形測量を実施し、今年度の発掘調査事業に至った。

2. 位置と環境

当遺跡は、石田三成の居城として知られる佐和山城跡の南斜面裾部の通称「餅木谷」に所在する。佐和山は、旧郡名でいえば犬上郡と坂田郡の境を画する山で、湖東地域と湖北地域を分けている。また、古来より畿内と東国・北国を結ぶ交通の要衝として位置し、現在は新幹線・名神高速道路等の主要な交通のルートが集まっている。佐和山は以上のような地理的な位置を占めるだけではなく、江戸時代には切り通しが作られ城下町と中山道を結ぶルートにもなっていた。これは、佐和山が東南側に谷が走り、北側を磯山で塞がれ、西側に松原内湖を抱える地形的な条件からくるものである。

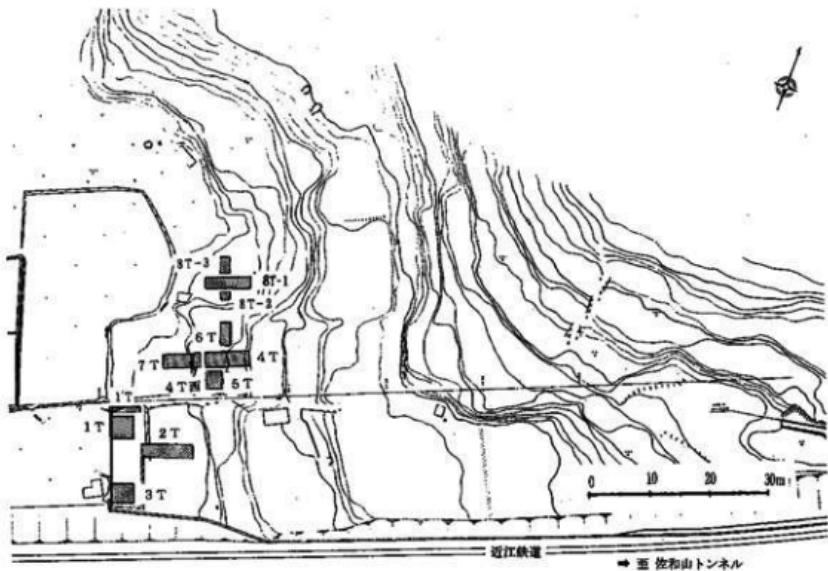


湖東焼窯場跡近景

この佐和山と松原内湖は、良好な生活環境を古くから人々に提供していた。滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した松原内湖遺跡は、丸木舟・琴等多数の木製品を含む多様な縄文時代後期からの遺物を出土して注目された遺跡である。この松原内湖遺跡は、近世まで続く複合遺跡であり、近世の火縄銃の玉等も検出されバラエティーに富む遺物が出土している。

中世には、石田三成の居城になっていたことから知られるように、佐和山城はこの地域の拠点的な城であった。このため、六角氏と京極氏、また六角氏と浅井氏等々の争奪の焦点になっていた。近世になって、彦根城の築城のためその資材のほとんどが運び去られ、江戸時代には若干の遺構を残すだけになっていたと伝えられる。また、佐和山西側据部には彦根藩の硝煙庫が設けられていた。

当遺跡をめぐる歴史的、地理的環境を概括したが、次に「餅木谷」の地形について若干のべる。湖東焼窯場跡は、佐和山南斜面裾部の近江鉄道佐和山トンネル西側に所在している。この谷は、6～7段の階段状のテラスが畑や藪の状態で存在し、藪の中のテラスの裾部に耐火レンガが並べられていた。この耐火レンガが露出している所が窯の跡であることが予想された。



東焼窯場跡 発掘調査トレンチ位置図

3. 調 査 結 果

湖東焼は、文政12年（1829年）に綱屋半兵衛等によって始められたもので、当初は芦川左岸の晒山に窯を築いたといわれている。しかし、その翌年には窯を現在の餅木谷に移した。この綱屋窯は13年間続き、伊万里・瀬戸等から工人を招いて操業した。その後、天保13年（1842年）12代藩主直亮によって藩の御用窯として召し上げられ、13代直弼の時代に最盛期を迎えた。湖東焼は、この時代に優品を多く生産している。しかし、桜田門外の変以降の藩の財政の悪化等により文久2年（1862年）14代直憲の時に民間に払い下げられ、明治28年まで民窯として操業されていた。

調査は、湖東焼窯場跡の基本的な資料を得ることを主目的に実施したもので、トレンチを設定して遺構の遺存状況や範囲を確認することとして計画した。

次に、各トレンチの状況を記す。



1 トレンチ整地状況

〈1 トレンチ〉

文政12年の絵図以降に拡張された田より1段高い石垣の上の畑に設定したトレンチで、絵図では絵付け場等と描かれているところである。土層は、耕作土を掘り込むと焼け土や未製品・窯道具で埋め立てられた整地層になる。また、この面で耐火レンガが1mほど並べられたものが検出できた。この遺構は、建物の布基礎とも考えたが、他の遺構が確認できていないためその性格は現時点では不明としておきたい。この整地層は、表面で溝等に見える土の違いがあったため、この性格をはっきりさせるため、石垣に沿ってサブトレンチを設定して土層の確認をした。この結果、整地した時の土の違いであることがはっきりした。

〈2 トレンチ〉

1 トレンチを設定した畑の1段上の畑に設定したもので、絵図では土置き場とテラスの仕切りに石垣が描かれているため、トレンチをテラスの下まで伸ばして設定した。土層は、耕作土の下が地山の岩になり遺構は確認できなかった。耕作土は20cm



1・2・3トレンチ全景

ほどの厚さで、遺物の出土もごく少量であった。また、テラスの段の部分での石垣は認められなかった。

〈3トレンチ〉

1トレンチと同一の畝の近江鉄道側に設定したもので、絵図では織工場が描かれている所である。土層は、耕作土を掘り込むと粘土の面が部分的に広がり、他のところは、1トレンチと同様の整地層であった。この面を若干掘り込んだが、未製品や窯道具等の遺物が出土している。また、この地点は谷の中央部に近いため、谷水が伏流して浸み出していた。

〈4トレンチ〉

テラスの段に耐火レンガが露出している地点に設定したもので、絵図によれば連房式窯跡が描かれている場所と考えられる地点である。この付近は、竹が密生している所でトレンチの設定は竹の根を掘り起こすことから始めなければならなかった。このトレンチでは、南側でかなり強い焼け面が確認できた。この面は窯の最終的な



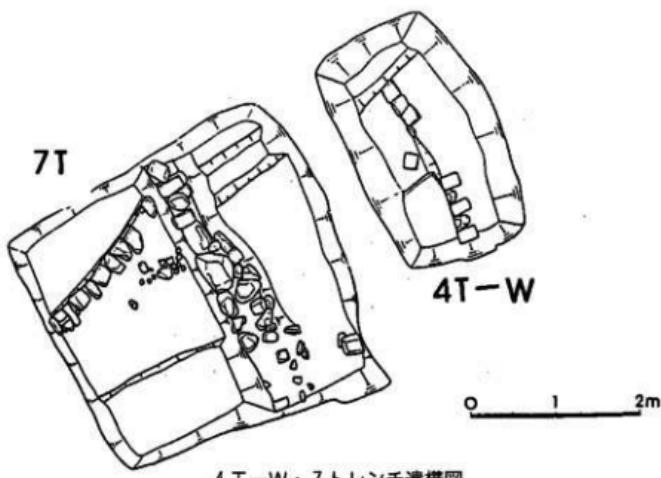
4・5・6トレンチ全景

床面と考えられ、南側中間部の焼け面より下は1段低くなり柱上に立った耐火レンガの20cmほどの間で半円形の煙突状の遺構が検出できた。この耐火レンガおよび半円形の煙突状の遺構はかなり強い熱を受けていたと考えられ、かなりぼろぼろの状態であった。また、この上は、部分的にしか焼け面は確認できることにより、床面は削平されている可能性が強い。

この4トレンチより上のテラスは、今回は調査区域外であり調査をしていない。

〈4'トレンチ〉

4トレンチ南側のテラスの段際に設定したもので、4トレンチで確認した焼け面の継続が確認できると期待した場所である。土層は、他の所と同様の表土であったが、この下の層は耐火レンガの破片や木製品・窯道具等で埋め立ててあった。これを1mほど掘り込むとトレンチ北側でかなり硬い面が確認できた。この埋立の層は、南側に急激に落ち込んでおり、ガラを取り去ると急激に傾斜した床面が確認できた。この傾斜した床面の上は、4トレンチで確認できた耐火レンガと半円形の煙突状の遺構が2組検出できた。遺構の状態から考えれば、焚き口から房へと火が登る煙道と考えら



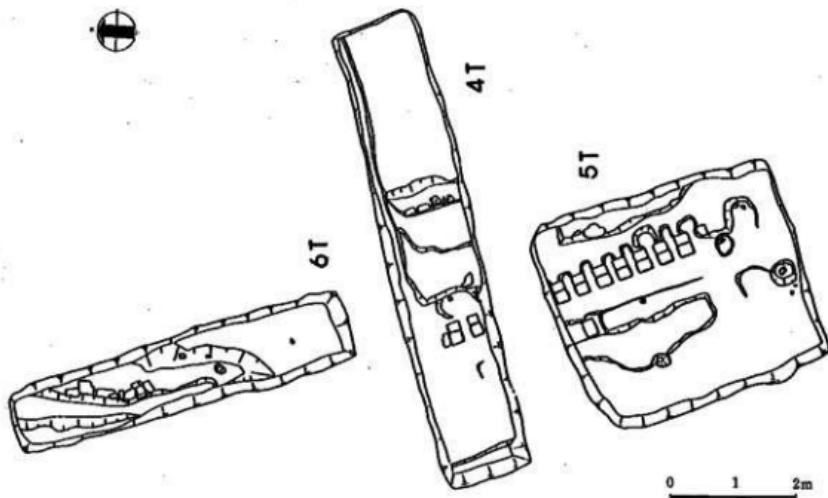
4T-W・7トレンチ遺構図

れる。

また、北側の段状の遺構は、レンガ等で埋められた所をベースにしていることから見て、最終的な拡張に伴って作られた面と考えられるが、ほとんど火を被った形跡は見られなかった。

〈5 トレンチ〉

5トレンチは、窯の焼け面の幅を確認するため4トレンチから直交するように設定したトレンチである。このトレンチでも焼けた床面を確認するとともに、トレンチ北側で柱状に耐火レンガが立てられ、その間に半円形の煙突状の遺構が確認できた。この煙突状の遺構は、焼成用の房の煙道であると考えられた。4'トレンチで確認できた焚き口の煙道からこのトレンチの煙道までが房の幅と考えられ、房の大きさは幅4.5m奥行き5mであった。また、焼け面は房の中をフラットな面で造られるのではなく、2～3段の階段状を成していると考えられる。



4・5・6トレンチ遺構図

〈6トレンチ〉

4トレンチの西側に設定したトレンチである。地山は、西側で急激に落ち込んでおり、未製品や窯道具・耐火レンガ片で埋め立てられてこのテラスが拡張されていたことが確認できた。また、この埋立層の地山に沿ったところで耐火レンガで造った石垣が確認できた、2回の埋立による拡張を行っていたことがわかる。埋立層はトレンチ内で1m以上の厚さがあった。

〈7トレンチ〉

4トレンチの下のテラスに設定したトレンチで、絵図では焚き口が描かれているところである。テラス下に露出した耐火レンガは、調査の結果土止め用に後から積んだものであることが確認できた。このトレンチでは、硬く叩き絞められた床面2面確認でき、焚き口の床面であると考えられるが、焚き口の輪郭はトレンチの大きさの関係で不明である。4'トレンチで確認した火の昇り口は等高線に対して斜めに造られており、トレンチの端で確認するにとどまった。



8 T-2 遺物出土状況

〈8-1 トレンチ〉

窯跡が確認できたテラス西側の1段下のテラスに設定したトレンチで、素焼物入並びに細工場が描かれているところである。現状は、窯に開墾されているが、この周辺では多量の失敗作や未製品・窯道具等が多量に表採できるところである。

土層は、表土が非常に薄く10cmほどであり、この下は未製品・窯道具等で埋立られていた。

〈8-2 トレンチ〉

8-1 トレンチに直交するように設定したトレンチである。このトレンチも8-1 トレンチと同様薄い表土の下で未製品・窯道具等による埋立がなされていた。また、工房の構造は確認できなかった。

〈8-3 トレンチ〉

8-1 トレンチの西側に設定したトレンチである。このトレンチのほぼ中央付近



8 T-1・3 遺物出土状況

で耐火レンガによる石垣が確認でき、この西側でもガラによる埋立がなされ、数回の拡張が行われたと考える。

〈1' トレンチ〉

南裾部の石垣のつながりを見るために、畑に登る道端に設定したトレンチである。石垣はL字形に曲がり、道に沿って約5m続いていることが確認できた。また、窯場に登る道は現在のようにだらだらとした登り道ではなく、フラットに門まで通っていたと考えられる。石垣は、野面石の落とし積みで裏込めのない空積みの構造であった。



1 トレンチ石垣検出状況

4. ま　と　め

湖東焼は、藍の染め付け・赤絵・青磁・金欄手等多彩な磁器の優品を残しており、磁器の窯と考えられていた。しかし、表御殿跡や彦根東高等学校の発掘調査で片手鍋等「湖東」と銘の入った陶器が出土していることから、磁器と共に陶器も焼いていた可能性があると考えた。今回の発掘調査で出土した未製品を見ると、絵付け前の素地の他に陶器の失敗作も多数出土していることから見ると、磁器と陶器を共に焼いていたことはまちがいないと考えられる。ただし、同時に焼成していたかどうかは、今回の発掘調査では確認できなかった。

発掘調査で明確に確認できた遺構は、窯場跡の主要遺構である連房式登窯の遺構であるが、この床面はトレンチの断面等の観察で少なくとも2回の床面が確認できていることから、2回もしくはそれ以上の改修を受けていることが確認できる。また、各トレンチで確認できた未製品・窯道具等ガラによる埋立の整地層は、窯場が度重なる拡張がなされていることを示している。この拡張されたテラスでの工房等建物の明確な遺構は、



石垣修理後全景

今回の調査では確認できなかった。このことは、今回トレンチを設定した地点にのみ見られることか、窯場跡全体に共通することかは現時点では不明であるが、石垣の高さが昔から変わらないとすれば、現在の畑の面が旧の地表面となり、遺構は畑の開墾時に削平された可能性が考えられる。また、絵図によれば焼成窯の房は6房前後の数が考えられるが4トレンチ上のテラスの断面の観察によれば、床面と考えられる焼け面があることから遺構が上のテラスまで続いていることは確実である。

湖東焼窯場跡は、江戸時代後期に成立した窯跡でその最盛期もこの時代である。最盛期には藩窯としてかなりの支出を行い当時の最先端技術を取り入れていた窯である。また60数年という短期間の操業時期は、この江戸時代後期の技術をそのまま残している可能性がある。このことは、この時代の窯業の歴史を考える上で貴重な資料となる可能性を示している。また、この時代の彦根の産業を考えると、地場産業として定着することなく衰退していった湖東焼の歴史は、特異なものといえるだろう。

以上のように、今回の発掘調査では、確実な遺構として窯跡を検出しておらず、この遺構を基準に絵図を検討することが可能になったと考える。

彦根市埋蔵文化財調査報告 第25集
滋賀県指定史跡湖東焼窯跡
発 挖 調 査 報 告 書

平成6年3月

編集 彦根市教育委員会
発行 彦根市教育委員会
印刷 (有)つくし出版印刷

